

北欧閣僚評議会「北欧男性」会議

何が、どうやって、何のために

論説員、北欧評議会員

Lauri Dammert

社会、少なくとも先進工業国の社会において、男女の労働分担や女性の地位は、今世紀急激に変化した。第二次世界大戦後は、同時に両性の平等への動きを加速させ、社会的領域での変化を促した。法律の面から社会的地位の面で、北欧女性たちは、その全てではないが完全な平等への長い道のりを経てきた。今でも大きなギャップがあり、たとえ女性に男性と同等の教育や専門家としての経験や仕事があったとしても、男性よりもまだ収入が少ないというような状況にある。

賃金労働市場への女性参入と、その結果としての家庭や社会における責任や義務の点での平等要求は、家庭生活を変化させた。この発展のあとに起こった両性の平等要求は主に女性によって取り組まれ、女の視点からとらえられた。

それにもかかわらず、平等の拡大は男性の生活や彼らの環境をも同様に変え、社会のあらゆるレベルに新しい緊張関係をもたらした。このような状況下で、平等のさらなる発展に欠くことのできないものは、平等が、共通の問題で共通の責任があることを両性が認めることである。

北欧地域において、女性は男性とほとんど同じレベルで労働生活に参加している。同時に、男性は家庭生活や家事に関与しているが、女性のように広範囲ではない。現代の北欧男性は、家庭や子どもたちの方に視線が向き出していることは明らかである。家父長的な「男性支配社会」の中で数十年間負わされてきた諸悪の根源としての非難は、男性支配の利益を全ての男性が得ていたわけではない、という事実があるにもかかわらず、罪の意識を多くの男性にも同様に与えたのである。この意識は現在、逆反応つまり「男性支配社会の一員としてより、個人としての自分の方が良い」という考えを生み出している。

その結果、男たちはこうした新しい社会における自分自身の役割に直面させられた。彼らは、なぜ仕事を通じてしか個人の満足を得ることができないのかと不思議に思う（私は自分の仕事よりも価値がないのだろうか？）。離婚の場合、女性が子どもと去ってしまった後、男性はなぜ全ての心理的接触を断たなければならないのだろうか。男性は、新しい現実新しい自己を捜し求め始めている。

1994年、フィンランドのトゥルクで開催された北欧フォーラム中、北欧閣僚評議会が、男性に関する平等会議を男性が組織する事に決めたのは、草の根組織やスウェーデン作家 Eva Moberg のような信頼できる人々の主導によるものだった。会議の目標は、次の問題を解明する事だった。

- ・現代の男役割の積極的な面
- ・セクシュアリティと父性
- ・男性と暴力
- ・男性についての探求



その会議が進行し始めるにつれ、これが確固たる議題を発表する場でなかったことが、実に早く明白になった。その始まりは、「我々には答えもなければ実のところ質問さえない。我々は問題を作成するためにここにいる」というものであった。

問題の作成

その会議が始まった時、これが共通認識を持てるようなしっかりした議題を提起する場ではなかった事が、実に早く明白になった。その出発点は、「我々には答えもなければ、実のところ質問もない。我々は問題を作成するためにここに居る」と言うものだった。

500 人余りの人々が会議に参加し、その 75% が男性だった。セミナーやスピーチの後、休憩中や夜にも継続した討議があった。会議場への往復のバスは、討議でにぎやかだった。簡単に言えば、それは提起された事実や意見を着席し、傾聴するというような問題ではなかった。参加者たちはその会議の進行上、不可欠な役割を果たした。つまり、問題の作成、提案、スピーチをする場面で、彼ら自身の考えや意志や見解を出す役割を果たしたのである。その会議は、子どもたちの絵や絵葉書コレクションの展示、書籍、個別組織や北欧閣僚評議会からの資料でいっぱいだった。余興もあった。食事には、オペラや流行歌、そして誰をも腹を抱えて笑わせるエネルギッシュな男性のベテランコメディアンの出し物があった。

現実と娯楽

これまで、男性こそが「究極のジェンダー」であるという古い格言を立証している膨大な事実や長期にわたる統計リストがあった。たとえ、仕事や教育、経験が同じであったとしても社会において男性は権力を持ち、普通女性よりも多くの収入を得るという標準的な論点があった。

しかし、男性は負の面にもたくさん現れている。それは、少年院や刑務所、精神病院や教育的援助の場面、薬物やアルコール濫用による暴行、また早すぎる死においてといった面であり、アイスランドの心理学者 Áspor Ragnarsson が豊富な統計（統計のいくつかは、この報告に付録として掲載されている）をもってこれを立証した。

この負の側面は異なった反応を引き起こした。一方には、スウェーデンの副総理大臣で



Roskilde 大学のデンマーク人ジェンダー歴史学者 Anette Dina Sørensen 談「人々は現代の男性の生き方における悪い面に注目するのではなく、新しく肯定的で活発な男の役割への出発点を担えるような固有の可能性に注目すべきである」

平等問題担当大臣の **Mona Sahlin** のような人がいた。**Mona Sahlin** は、平等は明らかにあなたのお金の問題や生活の問題であると言った人である。彼女は、「男性は収入を得るけれど、寿命を縮める。女性は長生きし、生活により密接な関わりを持つ」と言った。

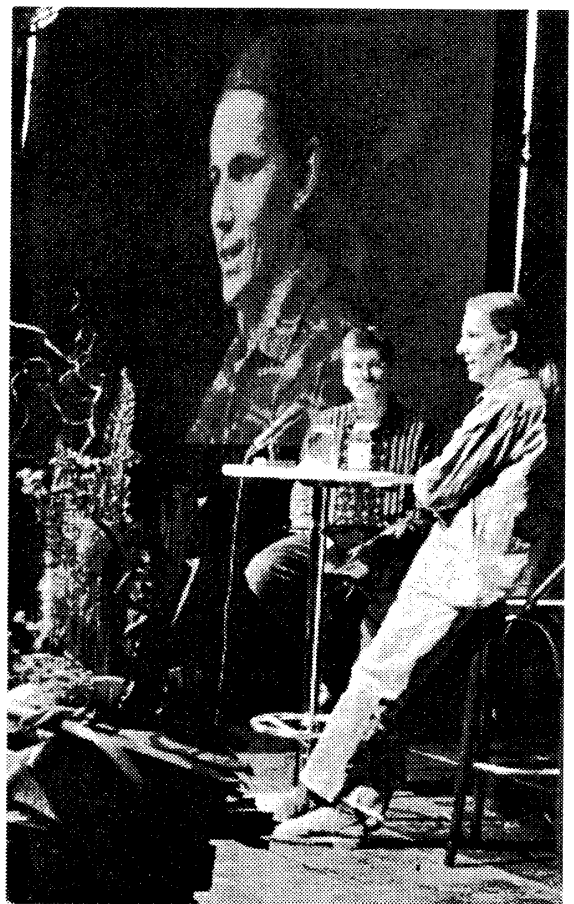
他方には、デンマーク Roskilde 大学のデンマーク人でジェンダー歴史学者の **Anette Dina Sørensen** のように、「我々は、現代男性の生き方の悪い面に注目するのではなく、新しく肯定的で活発な男の役割への出発点として発展させうるような固有の可能性に注目すべきだ」と言う人もいた。

また、フィンランドの研究者 **Tapani Kaakkuriniemi** は、冷笑を浮かべながらこう言った。「確かに、もし我々が減速するなら、結果としてもっと長く生きられる。しかし、人生の終わりの数年は困難以外の何物でもないのではないか？」

会議のコーディネーターは、有名なフィンランド人のテレビジャーナリスト **Stefan Randström** だった。この写真は、デンマーク人広告研究者 **Asger Liebst** との対談中の **Randström** (前方)、彼は広告に現れた 50 年代の家庭的な父親から、今日の精力的に余暇を楽しむ父親までを講演した (pp. 90-93)。

女性は玄関の鍵を持った事があるか？

『それは人生の疑問』の小劇場上演は、父としての男役割に近年持ち上がった議論の中の主要テーマについてだった。女性は、仕事や社会のあらゆる面での平等を実現した。しかし、家庭の面でも彼女らはしばしば、子育ての中で、何が正しく何が悪いかを定める人である。北欧諸国以外で、もし北欧諸国よりもっと頻繁に離婚が生じるなら、女性は子どもの保護管理者としての役割を与えられる。男性の親密な心理的関わりの全ては、一気に断ち切られるし、彼はこの危険を知っている。





男女の割合はほとんどの会議で同じように男性が70%だった。しかしこの会議では、その70%の男性が、専門家としてではなく、単なる男性として参加しているのがであった。また、その話は、男性、男性の子ども、男性の家族についてを予定していた。



アイスランドの作家
Einar Kárason(中央)
は、彼の著書を朗読す
るために参加したが、
代りに男性と男性会議
について議論すること
を望んだ。

小劇場は、聴衆の反応によってきわどい場面や判断を描写していた。よく知られたものとしては、父親におむつを替えさせないだろう母親、感情が利己主義と評される時の論点、女性の出産経験の共有、その状況に対する父親の全般的な準備不足などがある。

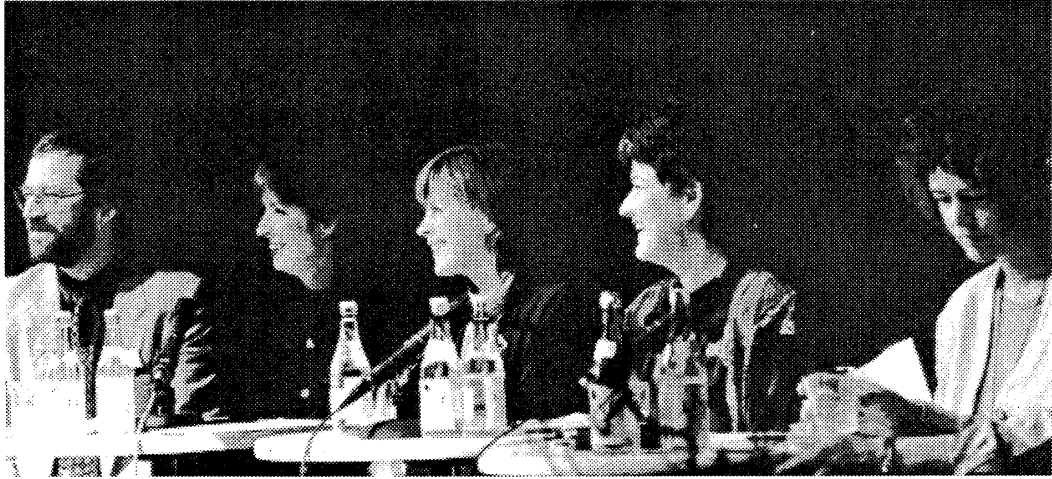
しかし彼らは、よく知られた態度を問題にするより他に答えがなく、同じ答えを持たない聴衆の方にそれを投げ返した。

「私は、柔軟性のない男性の動きのような神話の絵や男役割に、自分自身を認められない」と観客の一人が言った。「けれど私は、近代的男らしさが何であるかを言葉で表現する事ができない。我々は、それを話し合わなければならないだろう。年長者世代は、我々がもつ経験をもっていないし、彼らの経験は、現在の我々の社会とは違う社会のものである」

これを説明するものとして、Göran Wimmerstoröms の報告 (pp.26-29) がある。そこで、彼は出産やすぐそれに続く数ヶ月を待ち受けている父親に対して父親としての準備を支えようとしている。新しい父親のうち、ごく少数の者だけが、出産に立ち会い、忠告や経験をその息子と分かち合うことができる父親なのである。

ほら、男らしさの新しい理解のため、デイケアセンターに設置されたその小劇場





写真は左から、フィンランドの研究者 Tapani Kaakkuriniemi、スウェーデンの平等閣僚評議員 Mona Sahlin、ノルウェーの Grete Berget、デンマークの Jytte Andersen、アイスランドの上級公務員 Stefania Traustadóttir とのパネルディスカッションを示す。その討論中、男性と平等のデンマーク平等協議会会長の Hans Bonde は 7 つの提案をした (pp. 104-111)。

聴衆とそのパネルの議長だったフィンランド人ジャーナリスト Stefan Randström は、両親の未婚に関わらず、一般的な草案から自動的養育権にわたる問題の長いリストに基づいて質問した。

草案の問題について、女性にその草案を強要するような、北欧諸国の政治的意図はなかったが、適用する女性たちは認められると言うことを伝えた。我々が告げたその草案は、盲目的な敬意とは異なった側面を含む新しい内容も与えられるべきだった。

両親への自動的養護権の提案は、大きな討論を巻き起こした問題だったが、すぐに拒絶されたもう一つの提案は、分離政策をとった学校の考えだった。

30 年前、人は結婚すると子どもたちは自動的に 2 人の親に対して権利を持った。現在、人々は法律的に結婚しなくても、精神的な共鳴があればともに暮らす。子どもたちは二親に対する権利を失っている。

Jytte Andersen は、「それが良い考えだとは思わない。なぜなら、結婚は他の共存形態以上の特別な地位を与えられ続けるべきであるから」と言った。その発言に対しては、聴衆から異議が出された。他のパネル出席者は、その考えを拒絶しなかった。

若者、少年そして子ども

しかしながら、成人男性と将来の父親は、先進的な現代の北欧社会の中で、問題を持つ唯一の人ではない。両親が常勤の共働きで、その子どもたちは一日のほとんどを女子職員とデイケアセンターで、または主に女教師と幼稚園で過ごすような社会において、子どもたちはある問題をもつ。若者には具体的な男のイメージがなく、これは若年時代に明白である。この結果、ばかばかしいアクションヒーローや、めったにいない優れたスポーツマン、ポピュラー音楽家の中に、偶像を捜し求める事になる。「公共サービスは女性的側面を持つ」



聴衆参加—その場で議員らに尋ねている。

「おそらく、給料を増額する事によって我々はデイケアセンターの職員や教師の地位を高めなければならない」と一般市民は提案する。両親のそれぞれがデイケアセンターで一月に一度は働かなければならないような親の義務を定めたデイケアサービスの形態が取られるべきであろう。これは、そこに少なくとも一人の男性がいる事を保証するだろう。最良なのは、社会の全てのレベルで完全に職務の50%を男女が分担することであろう。

基礎としての父性役割

「何が問題か？」という質問の答えを捜し求める時、男たちの話し合いが子どもたちや家庭に集中するのは明らかだった。この論点は、すぐ意見の不一致を引き起こす。ここで、



子どもたちの絵を研究している。

ある人は家庭内の権力の移行に対する女の反感を見つけることすらできる。彼女は、男性が家族の日常生活に参加するための努力を要求もし、拒否もする。時にはひそかに攻撃さえする。しかし、これはもっと大きな構造の一部分である。つまり、現状では父親が子どもと接触を作り、発展させ、保持することを困難にさせる社会の中に、多くのからくりがあるということである。

意見の相違にもかかわらず、一般市民と政治家の両者が主要なテーマを理解するのは明らかだった。つまり、平等と新しい男役割は、誰かが人に強いることができるようなものではないということである。それは、その人たち自身によって発展させられなければならない道のりである。

Mona Sahlin や他の人が言ったように、平等に向けての討議とその過程は、次世紀中に発展する話題として最重要ではなくても、非常に重要なものの一つになるだろう。支配や管理や競争を自分自身や他者に強く押しつける古い男役割と家父長制社会は、老若男女に大きな問題を作り出す。変化は必然的である。すなわち男性文化の発展はゆっくり停止するだろう。さもなければ、人間は思考や感情や社会的個性のような素質を十分に発展させる事ができないであろう。

本書は、会議で行われたスピーチはもちろん、実施されたセミナーの縮小版を掲載している。また、統計と事実に基づく資料の付録を含む解説も掲載している。

会議の計画委員

Søren Carlsen デンマーク平等評議委員、コペンハーゲン、デンマーク

Tapani Kaakkuriniemi Jyväskylä 大学、ユバスキュラ、フィンランド

Sigurður Svavarsson c/o Mál&Menning (出版社)、レイキャビック、アイスランド

Bjørn Willadsen 労働組合連合 (LO)、オスロ、ノルウェー

Mona Danielson 社会保健省/平等問題部、ストックホルム、スウェーデン

Daniel Ekman 社会保健省/平等問題部、ストックホルム、スウェーデン

Christina Österberg/Marian Laxén 北欧閣僚評議会、コペンハーゲン、デンマーク

Birgitta Jungfelt 北欧閣僚評議会、コペンハーゲン、デンマーク

(松井幾子)